

9. 戸隠神社と九頭の祭にみる歴史的風致

(1) はじめに

九頭の祭が行われる戸隠神社は、郡上市東部の和良町に位置し、八幡町からは堀越峠を越え、更に国道 256 号を進んだ和良町上野山の麓にある。和良町の上沢と宮地との境が参道となっており、国道から北側の社叢へと伸びる。

和良地域は和良川を中心にして、土京川、鹿倉川（和良川）、鬼谷川の流域に集落を形成しながら発達してした。和良という名前は、平安時代に郡上郡四郷の一つ「和良郷」として書物に記されている。また、鎌倉時代は、はっきりとした記録はないが、室町時代には和良は郡上地域を治めた郡上東氏の庶流である遠藤家が統治していた。やがて、江戸時代初期に旗本である千石遠藤領及び二千石遠藤領、そして幕府直轄領の三分割に統治されて、明治維新をむかえている。

さて、戸隠神社の主祭神は天手力男命であるが、古くから明治 6 年（1873）までは、九頭龍大明神であった。九頭の宮とよばれ、「重ね岩」（市史跡）【2-9-1】が鎮座する古社である。「重ね岩」は、『古事記』の天岩戸伝説の「手刀雄命」が投げた破片であるという伝説がある。



2-9-1 戸隠神社 重ね岩

(2) 建造物

戸隠神社

- ・ 戸隠神社本殿及び本殿彫刻・木造棟飾【市重要文化財（建造物）】
- ・ 戸隠神社の舞台（宮地）【市重要文化財（建造物）】
- ・ 戸隠神社の舞台（上沢）【市重要文化財（建造物）】

戸隠神社の由来は、慶応 2 年（1866）「九頭龍大明神由来書」によると、天正 2 年（1574）の頃早魃にあい、雨乞いのために長野県戸隠山の地主神である九頭龍社の祭神「九頭龍大神」を勧請したと伝わる。社殿の創建は不詳だが、文禄 3 年（1594）落雷により焼失し、慶長 12 年（1607）藩主遠藤慶隆により再建された棟札が本殿に残る。近代に入り、明治 7 年（1874）に戸隠神社に改称した。

本殿は、桁行 3 間梁間 2 間、流造、向拝の手挟みに「昇り龍」、正面支輪に「波に水鳥」、長押上部に「獅子鼻」、臺股に「十二支」の彫刻が施されている。「十二支」には元文 4 年（1739）の寄進年が記されており、本殿は江戸中期の建築である【2-9-2】。

拝殿は、木造瓦葺、桁行 6 間梁間 3 間で、創建年代は不詳だが、宝永 3 年（1706）の棟札があり、昭和 3 年（1928）に現在地に移築された【2-9-3】。拝殿の奥の石垣の上に、本殿と末社があり、戸隠神社の本殿と舞台 2 棟は「市重要文化財（建造物）」となっている【2-9-4、5】。



2-9-2 戸隠神社 本殿



2-9-3 戸隠神社 拝殿



2-9-4 戸隠神社 舞台（宮地）



2-9-5 戸隠神社 舞台（上沢）

また、神社周辺及び境内の景観及び歴史的風致を形成している戸隠神社の一本スギ、社叢、そして重ね岩がある。

戸隠神社の一本スギ（県天然記念物）は、樹勢に影響を与えるような人為的な環境変化もなく、旺盛な成長を維持しており、良好な保存状態にある。樹木の品質は極めて良く、素直な樹肌をしており品格がある。樹木の形状は、孤立木としての典型的な「スギ樹形」をしており、堂々とした姿である。樹木の大きさは、樹高約 33m、根本の周囲 6.5m、目通り 5.7m、枝張りの長径 20.4m、短径 17.5m であり、成長を続けている。類似個体との比較及び立地条件評価と大きさとの関連分析による樹齢は 700 年と推定される。地元の由来では建治元年（1275）に植えられたとあり、県下でも有数のスギの古樹・巨樹である【2-9-6】。

次に戸隠神社社叢（県天然記念物）は、山裾部に立地し、開発や地形変化の影響を全く受けない状態で推移してきている。鳥居の両翼に樹木が配置され、やや奥まって社殿が置かれ、それを取り囲みさらに奥に展開する社叢が、神域を構成して



2-9-6 戸隠神社の一本スギ



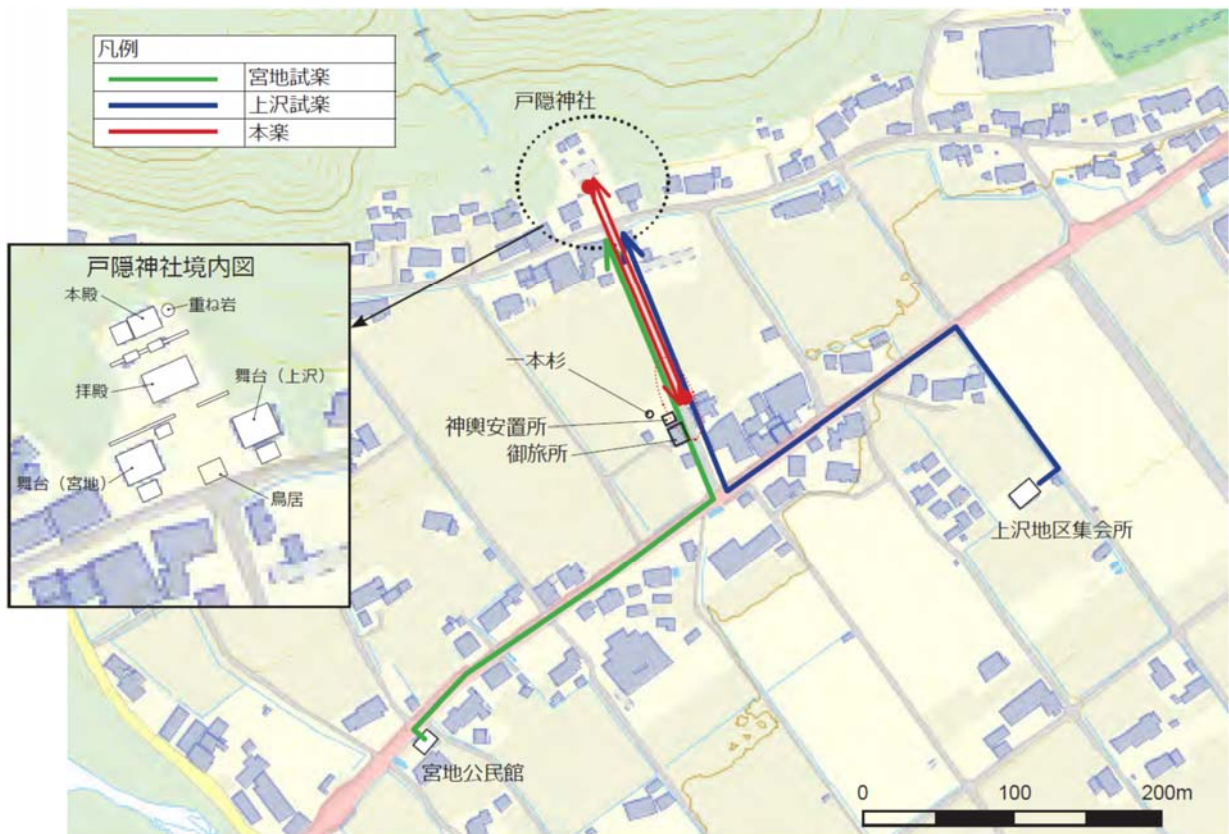
2-9-7 戸隠神社 鳥居・社叢

いる【2-9-7】。山裾部に神社を配し農耕地に連続する構図は、里山地域一般にみられるものである。戸隠神社に所在する樹木のうち、特に樹齢が高く大径の個体を特定し指定木とした。その総数は52本であり、内訳は、スギ34本、ヒノキ14本、マキ1本、ツクバネガシ2本、サルスベリ1本である。樹木の成長は旺盛で全体に健全な状態にある。現存する個体については特に欠損などはない。また、保存状態も良く堂々たる社叢の風格をそなえている。この52本について樹齢でみると、最高で約900年（スギ）から若い個体で150年ぐらいである。これは大切に大径木に育てながら、時に伐採して神社を維持し、その後持続的に更新させてきた社叢管理の歴史を物語っている。

最後に「重ね岩」（市史跡）は、戸隠神社の本殿の隣に鎮座する重岩であり、大きな岩が2つ重なっていることからこの名前が付いている。上部の岩は推定42tの重さがあり、片手でグラグラと動かすことができるといわれている。その昔伊勢の天の岩戸のかけらが飛んできたといわれている【2-9-1】。

（3）歴史的風致を形成する活動

九頭の祭り【市重要無形民俗文化財】【2-9-8】



2-9-8 戸隠神社 位置図と試楽順路

①九頭の祭りの歴史

戸隠神社の例祭は旧暦8月15日に行われていたが、その後月遅れの9月16日、昭和41年（1966）に9月15日とかわり、現在は10月の第2日曜日に本楽を行うこととしている。例祭は、九頭の祭として市重要無形民俗文化財となっており、和良町で最も大き

な祭である。九頭の祭では、大神楽と伊勢神楽、からくりなどで構成され、宮地、上沢が各1組ずつ出す。

江戸時代では、宮地と上沢で諸役を担い、法師丸が神輿担ぎと神輿神楽の奉奏、下沢が上沢の曳山に奉仕し、4村で行われていた。中核の宮地は旗本領、上沢は幕領で、異なる領主の支配下であったため、別々に神楽を奉納していた。文化10年(1813)「九頭宮の祭り神楽行列之定書」によると、この年、両村は一つにまとまって奉納するよう話し合い、神楽の順序を決めたとある。これは現在も受け継がれており、法師丸と下沢は昭和3年(1928)まで奉仕していたが、現在は宮地と上沢で継承されている。

天保11年(1840)「郷中盛衰記」では、「九頭の祭り見物二行に黒もじの夏羽織着し行」といった祭り見物のことや、「・・・神楽下洞へ来れば留置キ稽古致されしよし、喜八郎ハたいこ、縫右衛門ハ獅子、小善次ハ悪魔はらいなど是始りなり、外村々ハ宮地が元なり」と神楽を学ぶ村人の様子が書かれている。また、大神楽や伊勢神楽や芝居は祭礼のときに披露されたようである。弘化2年(1845)「九頭宮祭あやつり組連印書付之事」により、当時からからくりがあったことが分かる。

②祭りの特徴

九頭の祭の特徴である奉納芸の役をみると、神楽総警護のもと、大神楽警護、馬乗り警護、伊勢神楽警護、操り警護、神輿警護が選ばれ、各係を総括、指導している。宮地、上沢は各々およそ50戸であり、各地区の役が100名ほどになるため、一人二役もある。【2-9-9】

祭礼の準備は、奉納芸の稽古、道具の修繕や製作など長期にわたるもののほか、試楽の前日に稽古の総仕上げ(仕組)、試楽日の午前中に神社の設え、参道の幟立てなどを行い、曳山を舞台から出し、参道に据える。午後に試楽を行い、翌日本楽を行い、本楽の翌日に後片付け(幟倒し)を行う。

③試楽

試楽では、参道に安置した2地区の曳山から囃子が流れ、上沢は「ちゃんところ」「那須与一」、宮地は「おかめ」「とんぼ返し」が演じられる。上沢の曳山は千鳥破風、宮地の曳山は唐破風である【2-9-10】。

次に、それぞれの集会所から、大神楽の巡行が始まる【2-9-11】。西から宮地、東から上沢が大門

に入ると縦二列に並び、総警護が打ち合わせ、神楽囃子を合奏する。先導、先箱持ち、纏

2-9-9 宮地 奉納芸 役内訳

総警護	2
大神楽の部	53
大神楽警護1、舞子警護1、舞子指導3、舞子3、笛吹き5、笛吹き助4、鼓打ち5、鼓打ち助2、小太鼓打ち1、小太鼓打ち助1、大太鼓担い2、大出し持ち1、纏馬印持ち1、先箱持ち1、棒振り1、東西呼ばり1、小太鼓持ち1、獅子頭持ち1、大獅子回し12人、馬乗り6	
曳山の部	12
操り警護3、操り囃子方6、操り山こで3	
伊勢神楽の部	15
伊勢神楽警護2、悪魔払い2、獅子舞1、笛吹き4、小太鼓打ち2、おかめ1、神主1、出し持ち1、屋形担い2	
神輿の部	9
神輿警護2、神輿神楽5(笛2、鼓打ち2、小太鼓打ち1)、神輿担い2	
世話役	6



2-9-10 ヤマ(曳山)

馬印持ち、棒振り、馬乗り、大出し持ち、総警護、大太鼓、舞子、東西呼ばり、小太鼓、笛吹き、鼓打ち、大獅子で構成される。

社務所に隣接して神輿安置所が参道に面しており、御旅所となっている。上沢と宮地は1列になり、左回りで輪を作りながら「庭入り」を行い、大神楽の馬乗りが始まる。「直り駒」「引き返し駒」「休み駒」「進み駒」「駒違い」の演目を続け、「庭引き」で一人ずつ去っていく。獅子が出てきて南面し、舞子や大太鼓と対面する。東西呼ばりの神楽舞開始の口上後、笛と太鼓による「起こし笛」で始まり、演目「大神楽」、「大獅子」、「おかざき」の獅子と舞子が舞い、「こすずみ」で大神楽が終わる【2-9-11、12】。

曳山からくり人形の演技が始まり、上沢は「ちゃんどこ」「那須与一」、宮地は「おかめ」「とんぼ返し」である【2-9-13、14】。



2-9-11 試楽 御旅所での大神楽奉納



2-9-12 試楽巡行の様子



2-9-13 上沢のからくり 那須与一



2-9-14 宮地のからくり トンボ返し

④本楽

本楽は、神事の神幸発神輿祭から始まる。社務所から氏子総代長、両地区長、神職、氏子総代、神輿担ぎ、神楽員、供奉者などで列をなし、参道を北へ進み、拝殿に入る。神事が進む中、神輿神楽員は「こすずみ」を演奏する。一方で、両地区の集会所から試楽と同様の神楽員に加え、伊勢神楽員、伊勢神楽屋形などの奉納芸の役が出立する。

神事が終わると、一行は御旅所へ向かい、参道を南へ進む神幸（神輿渡御）となる【2-9-15】。



2-9-15 神輿渡御

大神楽の曲を演奏しながら進み、鳥居を出ると神輿を彩色に施した二輪車に乗せ、曲は「さがりは」となる。巡行してきた奉納芸の一行が御旅所南の参道に集結すると曳山は「ちゃんこ」「おかめ」を始める。神幸の列が曳山の前でとまり、南の参道では、馬乗り役が整列する。

神輿が御旅所に安置されると御旅所祭となり、神事と大神楽の奉納が行われる【2-9-16、17】。続いて、曳山のからくりが演じられ、曳山に続き、先箱、馬乗り、大神楽員、伊勢神楽員、神輿、神輿神楽員が長い列をなして還幸（神輿還御）となる【2-9-18、19】。



2-9-16 本楽 御旅所での神事



2-9-17 本楽 御旅所での大神楽奉納



2-9-18 本楽巡行の様子



2-9-19 本楽 神輿（還御）

曳山が境内に入り、各舞台前の北側に置かれ、本殿祭では、神事や諸芸能が奉納される。馬乗りの演技【2-9-20】が終わると、中央を神輿が進み、拝殿背面に置かれ、伊勢神楽屋形は舞台に据え置かれる。神事が行われ、大神楽が奉納されると【2-9-21、22】、舞台上で伊勢神楽が始まる。伊勢神楽は、「悪魔祓い」に始まり、この「悪魔祓い」の中で、「上使弁慶の舞」と呼ばれる口上がある【2-9-23】。その後、「カヤの舞」「鈴の舞」「幣の舞」「祭文」「おかめの舞」【2-9-24、25】が演じられる。伊勢神楽が終わると曳山からくりでは、宮地は「とんぼ返し」、上沢は「那須与一」が演じられ、曳山からくりの両端に飾られていた造花と筒を投げられる「花投げ」で終わる【2-9-26】。花は、かつて養蚕の呪符であったが、現在では家内安全、交通安全のお守りとなっている【2-9-27】。参詣人が帰る頃、余興の準備や宴会が始まる。



2-9-20 本楽 馬乗り



2-9-21 本楽 大神楽



2-9-22 本楽 大神楽



2-9-23 悪魔払い（上使弁慶の舞の口上）



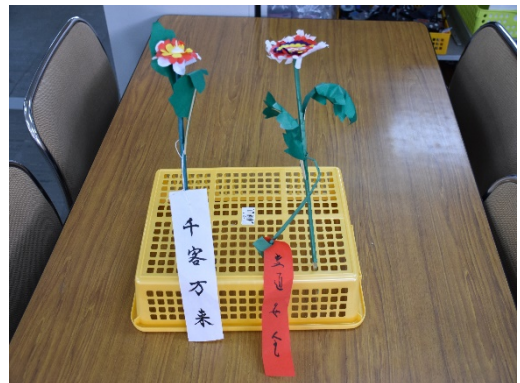
2-9-24 本楽 上沢 伊勢神楽（おかめ）



2-9-25 本楽 宮地の伊勢神楽



2-9-26 花投げ



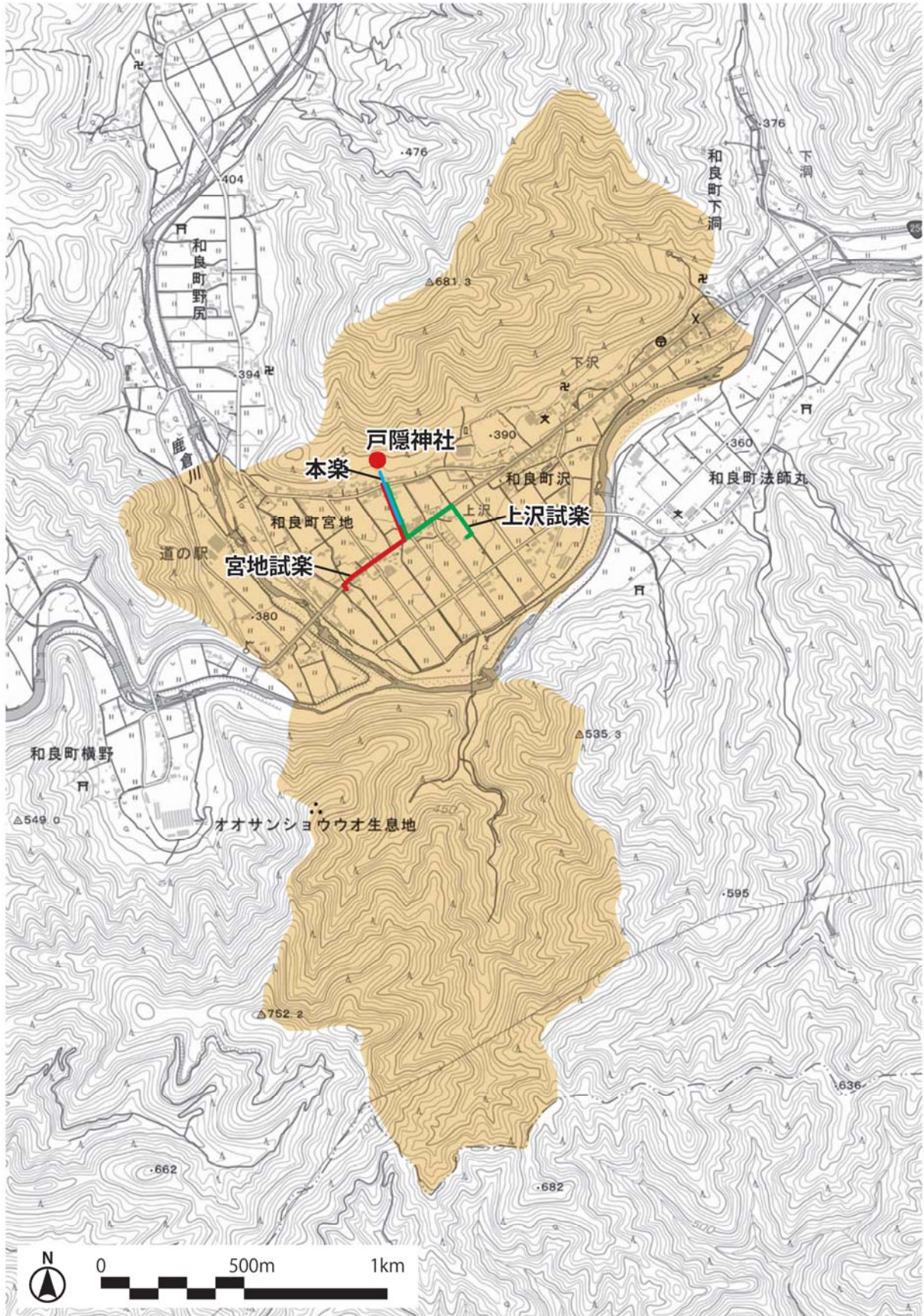
2-9-27 お守りの花 左：宮地の花 右：上沢の花

(4) おわりに

九頭の祭は、近世において幕領、旗本領であった頃からの社会的要因も受け入れながら、継承してきた。その結果、上沢・宮地の2地区同時奉納といった、市内では非常に特徴的な祭礼となっている。更に奉納芸能が、大神楽、伊勢神楽、市内でも希少なヤマ（曳山）といった多岐にわたるのも、大きな特徴である。

宮地公民館、上沢集会所からの巡行は、和良の開けた田園風景の中を、それぞれ100名ほどの役柄やヤマ（曳山）が進んでいくにぎやかな一行となって現れる。そして、参道の少し前で2地区が調子を合わせ、競い合い、また同調させて参道を進んでいくと、戸隠神社境内では、二つの舞台が相対し、ここでもそれぞれの伊勢神楽が奉納される。

和良の山とみどりに囲まれた開けた平地を巡行しながら、山際の戸隠神社社叢へ集約し、磐座と社叢の中にたたずむ戸隠神社で行われる九頭の祭は、2地区の住民たちそれぞれが演じ、多岐にわたる芸能と周辺の開けた田園風景が歴史的風致を醸し出している。



地理院地図（国土地理院）に歴史的風致の範囲、要素を追記して作成

2-8-28 戸隠神社と九頭の祭にみる歴史的風致の範囲図